

# 加藤清正の実像

天正19年(1591)に東北を平定して国内統一を果たした豊臣秀吉は、かねてより表明していた「唐入り」を本格化させます。そして、翌年に日本、朝鮮、明国の3国を巻き込んだ6年におよぶ朝鮮出兵が始まります。

## 〈13〉朝鮮出兵 - 釜山浦上陸から漢城入城まで -

天正19年8月、清正は京都で秀吉に謁見し、来年3月に唐※へ攻め入ることを正式に伝えられ、それとともに国内の前線基地となる名護屋城の築城など唐入りに備えるよう命じられます。直後の8月13日に清正は、熊本でも唐入りの準備を整えるため国元の家臣へ書状を送っています。それには家臣や奉公人の増員、軍事物資の調達・確保、舟の手配など36項目におよぶ細かな指示が書かれていますが、この書状の冒頭で清正は「唐を征服後は20か所の地域を秀吉様より与えられることになっている」と家臣に対して大風呂敷を広げています。これは清正の領土欲というよりは、家臣を鼓舞するための清正なりのリップサービスだったと思われるのですが、唐入りに対する清正の意気込みが伝わります。一旦熊本に戻った後、10月からは肥前・名護屋に滞在し、そこで黒田長政や小西行長とともに名護屋城の普請をおこなっています。

さて、ここで朝鮮出兵へ至る過程を確認しておきましょう。秀吉の目的はあくまで唐(明国)の征服でしたので、朝鮮に対しては日本への服属と「仮途入明」(明国へ侵攻する日本軍に朝鮮の道を貸すこと)を求めました。この交渉にあたったのが小西行長と対馬の領主・宗氏です。結果的にこの交渉が決裂したため、まずは朝鮮を武力で降伏させなければならなかったのです。

京都に留まっていた秀吉は、天正20年3月13日に「陣立」(軍勢の編成)を発表します。それによれば清正は、鍋島直茂、相良頼房とともに第2軍に編成され、清正が率いる軍勢は10,000人となっています。鍋島が12,000人、相良が800人ですので、第2軍は総勢22,800人です。第2軍は、行長率いる第1軍に続いて朝鮮へ渡る手筈になっていました。

3月末をもって対朝鮮交渉が打ち切れ、ついに4月12日、行長ら第1軍が朝鮮へ渡海します。海上の天候不良のため第1軍に遅れること5日、清正率いる第2軍が17日に待機地の対馬を発し、翌18日に釜山浦に上陸します。上陸後、漢城(当時の都、現在のソウル)に入るまでの間、史料で確認できる限り、清正は日本に対して4度戦況を報告しています。その報告から清正の行動を追ってみましょう。

まず清正は、上陸後10日ほどで梁山と彦陽の城を立て続けに攻め落とします。そして4月20日に慶州の城、22日に永川の城を攻め、これらも難なく陥れます。慶

州では3~4,000人の朝鮮兵を討ち取ったと報告しています。清正は「数日のうちに都へ入る報告ができるでしょう」「城攻めは全く労力が要らず、ご安心ください」と余裕ぶりを見せ、まさに破竹の勢いで進軍したことが分かります。

4月28日に漢城から約100km離れた忠州に入り、行長ら第1軍と合流します。そこで両軍は漢城へ向かう進軍ルートについて協議し、第1軍は北進して漢城へ至るルート、清正ら第2軍は西へ進むルートを採り、翌29日に忠州を発します。「清正記」には、この時の進軍ルートを巡って清正と行長が対立する場面が書かれています。先に漢城に入りたい清正が、漢城へ入るためには大きな河を渡らなければならない西ルートを行長に強要したため、行長が激怒し、先陣争いを巡って激しく口論を交わす有名な場面です。しかし、清正と行長が先陣を競って対立したことをうかがわせる確かな史料はなく、また、両者が漢城への一番乗り固執している様子もないため、後世に創作された可能性も考えられます。

さて、第1軍は5月2日に東大門から漢城へ、翌日に第2軍が南大門から漢城に入りますが、忠州陥落の報を受けていた朝鮮国王らはすでに漢城を脱出した後でした。このことを大いに悔やんだ清正は、すぐに脱出したと思われる方角に配下の者を派遣して、一行を捜索させています。一方、秀吉は5月16日に名護屋で漢城陥落の報告を受け、思いのほか早く漢城入りしたことを満足に思う旨を記した書状を清正に送っています。第1軍の釜山浦上陸から漢城入りまでわずか3週間。秀吉もこれほど順調に、しかも早く都を落とせるとは思っていなかったようです。

※唐…日本における中国の呼称

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

